

コヘレトの言葉3章 1-15 節 「定められた時」

コヘレトは最初から最後まで、ひたすら「空しい」という言葉を38回繰り返しています。「コヘレト」とは、元々「集める」という意味から、「集会を司る者」と訳されるようになり、口語訳聖書では「伝道の書」となっていました。その伝道する者が、なぜこのような「空しさ」を連呼するのでしょうか。

「空しい」とは、「儚い・束の間」という意味もあります。これは単に、「空っぽ・無意味」ということだけではありません。時間的な意味合いも込められているのです。今日の3章は、「時のリスト」と呼べる言葉が記されています。「何事にも時があり／天の下の出来事にはすべて定められた時がある。」(1節)そのように語り始め、「生まれる時、死ぬ時／植える時、植えたものを抜く時」(2節)と、全部で28もの時を書き記します。ここでコヘレトが言いたいのは、すべて神さまの支配の中にあるということです。そして地上に起こる「時」というのは、今日の聖書箇所には記されている時だけではありません。数えきれない「時」というものを刻みながら私たちは生きています。でも、その中でコヘレトは「殺す時」「破壊する時」「泣く時」「嘆く時」「石を放つ時」「戦いの時」と記します。つまり、これらは戦争をほのめかす言葉であるということです。7節の「裂く時」とは、服を裂くということですが、この行為は激しい悲しみによって、喪に服することを意味します。そのような激しい痛みの中で、束の間の「笑う時」「踊る時」が訪れるのです。そして最後に、「平和の時」という言葉で終わります。多くの時を刻みながら、最後に平和が訪れることを誰もが望んでいます。あれだけ「空しい」と語るコヘレトが、「時」を語る部分においては一度も「空しい」と口にしないのです。だから、11節にはこのようにあるのです。「神はすべてを時宜にかなうように造り」と。これは、以前の翻訳では、「神のなされることは皆その時にかなって美しい。」と訳されていました。コヘレトは、「美しい」とたたえるほど、神がなさる創造の御業は美しいということです。この創造の御業の中に、自分もまたいのちを与えられ、人間として創造されたという喜びが溢れているような言葉です。

そのような「時」の中、私たちが心に留めるべきこと。それは、神さまのことをすべて理解できないということです。そして投げやりになるのではなく、神さまのことが全部分からないからこそ、神さまを畏れ、謙虚になりなさいと、伝えているのです。そして、分からないからこそ、神さまと対話をずっと続けていきなさいと伝えるのです。自暴自棄になって、自分を見失ってはいけない、と12節でも伝えます。コヘレトがここで見つめるのは人生の喜びです。「喜び楽しんで一生を送る」とは、神さまから与えられた人生を、徹底的に喜び、楽しむのだということです。神さまを徹底的に畏れ敬うことが、同時に、神を喜び楽しむことであり、自分を喜ぶ生き方と一つに結び付いていきます。そして、コヘレトは人生における喜びと楽しみの一つとして、13節にありますように、「人だれもが飲み食いし」ということを見つめています。神さまの栄光を現す生き方は、日曜日、教会で礼拝をささげている時に限られているではありません。食べる時も、飲む時も、私どもが生きる日常のすべての時が、神をたたえる時、定められた時となるのです。神さまがゆるしてくださる限り、与えられた地上の時を、私たちは喜んで歩んでいくのです。